

古典の日絵巻
「第四巻・琳派400年」



「色絵槍梅文水指」尾形乾山
京都市立芸術大学芸術資料館蔵

第15号：平成27年7月17日 乾山 —— 2

乾山は、兄・光琳とは五歳年下で八十一歳の寛保三年に没しており、五十九歳で亡くなった光琳より長命であった。そのためか兄の後始末をせざるを得なかった。合作も出来なくなった乾山は、古希を迎えようかと云う歳になって京を離れ、江戸へ下る。下谷入谷町に居を構えたが、火事にあい佐野を訪れることになったのだろう。

「佐野乾山」と呼ばれる綺麗な色彩の焼き物について、かつて真贋問題が話題となったこともあるが、現在では肯定的な見方がなされている作品を遺した。

葉室麟の短編『乾山晩愁』には光琳・乾山兄弟の間柄が活写され、さらに『花や散るらん』では兄・光琳と大石内蔵助とが親しい知り合いであったと想像の夢を広げる展開が記される。興味をお持ちの方はご一読を。

